

本邦高地聚落の研究(第一報) (二)

——現地調査を主にして——

小 牧 實 繁

金峰山圖幅

本圖幅中の矢出原牧場に就いては、前圖幅八ヶ嶽圖幅中の矢出原牧場に就いての記述を參照のこと。

前掲拙稿に於いては矢出原牧場(現在の東信二ツ山牧場)、金山の外に秋山、梓山、新田、川端下の四者を擧げ、新田と川端下とを別個の聚落なるかの如くに取扱つて置いた。それは或る意味では正しいのであるが、土地の人達は新田を川端下のうちとしてゐる。よつて本稿に於いては川端下のうちに新田を含ませて記すこととする。

川端下の水田は梓山の上の水田と同様、三澤氏の御示教の如く今は桑園に變じてゐて、川端下には全然米を産しないが、畑はある。併し畑作も殆んど自家用で賣るものは川上名物蕎麥だけである。養蠶は春秋二回やるが、土地が高く氣候が寒いので春蠶が實は夏蠶であつて、六月下旬に掃き立てられる有様である。馬の飼養も川端下三十六戸(新田を含む)に馬二四頭(外に牛が五頭居り、又近

年山羊を飼ふものもある)で特に盛とは言へない。(馬は矢張り子馬を海ノ口市場の當歲市に出すのである)川端下では寧ろ山稼ぎの方が重要かも知れない。山稼ぎでは炭焼、木馬曳きが主であり、又製板事業の伐採に備はれる。冬、雪は降つても凍るから長靴を穿けば炭焼は出来るのである。併し伐採は冬は駄目、木馬曳きも冬は駄目、冬の山稼ぎは炭焼といふことになる。併し川端下では山稼ぎが主とは言ひ切れないやうで、夏は養蠶と百姓で農家は多忙を極めるのである。尙、川端下では小麥を收穫してゐるのを見たが、これは粉にして食用に供するさうである。米の不足を幾分なりとも補ふのであらうか。その他川端下には獵師が二人居り、山には熊も鹿も居り、禁獵の岩鹿(羚羊のことならん)も近來頗みに殖えて來た由であるが、この獵師は雉、山鳥、兎などをとるのであり、(梓山では熊をとると言ふ)又川には岩魚が居り一晚に一貫くらゐは突ける由であるが、それがどれだけ此の村の經濟を助けるかは疑問である。尙、土地所有關係に就いて言へば、聚落附近の山は村の共有地であり奥山は國有林となつてゐて、その間、村人の私有地があるのであるが、事業家は安くでこれを買ひ、或ひは國有林の拂下げを受けて、川端下でも製板工場(柱なども作る)を經營してゐるのである。經營者は村外の人であるが、工場が川端下にあるので、川端下の人も備はれて行く譯である。川端下開發の歴史は舊家の火災で文書が失はれたために詳しいことは知るに由もないさうだが、口碑には川端下千軒と言はれ、武田信玄の時、水晶山(川端下の東方)から水晶と金を探つて軍用金とした時代には川端下も榮えたものであると言ふ。川端下の金峰山神社のある部分を本郷と言ひ、下流の山のある部分の新田と言ふところを見ると寧ろ下流の新田の方が後に開けたも

のらしい。そして新田は文字通りに新田を開いて開けたものであらう。但しその水田は今では前記の如く桑園や蕎麥畑と化してゐるのである。筆者は金峰山の登頂を目標に置いて川端下まで行つたのであるが日程の都合で素志を果し得なかつた。従つて川端下聚落の金峰山神社から上流に如何なる建造物があるかを自ら明かにすることが出来なかつた。併し懇切な土地の人の教示によつて或る程度まで正確にそれを知り得た。これによると川端下の南方に神社の記號を以て示されてあるものは大日堂であり、その南方一六一四米三角點の東方なる建物は林業事務所で常住、炭焼をやり、その南西方、道路の兩側の二つの建物は製板工場であるが、目下は休業中とのこと、それより南西、西股澤の澤の字の肩に位置する建物は八幡の御堂で登山用のもの、非住であり、金峰山頂には元來御堂があつたが二十數年前焼失して以來未だ復興するに至らないとのことである。(これ等のうち明治四十三年測圖に記載せられず昭和四年要部修正測圖に補入されたものが多い)尚、金峰山川の上流、岩根山の斜面には岩根牧場があり、これが區有の牧場となつてゐて、六月初めから九月一杯、時には十月二十日に及ぶ間の馬の放牧に利用せられてゐる。組合の組織は無いが柵は村で作る。舍飼のためには區有の採草地(クサカリバ)があつて九月から十月十日頃にかけて草を刈る。草を食はせると同時に踏ませて肥料をとることはまた他に於けると同然である。

秋山は一部分は高度一三〇〇米以上に位置するが一部分は一三〇〇米以下に立地する。水田のあるのは一三〇〇米以下の部分である。而もその水田でとれるだけでは米は不足で、秋山の需要の四分くらゐ、六分は買入れなければならないのである。農耕に就いて言へば、陸七分に田三分で、岡で

は蕎麥を専門にやる。勿論、麥、粟、稗^{ヒエ}、大豆、小豆なども穫れるが賣るのは蕎麥だけであると言ふ。併し筆者の實見によれば新田の下流、秋山の上の古い河成段丘の上では、粟、蕎麥の外に盛んに白菜、馬鈴薯が作られてをり、白菜は忙しく畑から村に運ばれ組合から出荷せられてゐたのである。粟は團子などにして食ふと言ふから全く自家用らしい。農家では副業に馬を飼つてゐる。(牛は飼はぬ)馬の無い家もあるが二頭居る家もあり、秋山六五戸(明治四十三年測圖と昭和四年要部修正測圖とでは人家の記號の數に相異が認められる)が平均一戸一頭の馬を飼つてゐる。五月初めから十一月終りまでは區共有の秋山牧場に放牧する。馬の放牧場にある期間は七ヶ月に亘るが、秋山では、その間に堆肥をとるため舍飼にすることがある。草刈場は個人持ちのものが山べにある。農家の副業としては養蠶も行はれ、春蠶は六月から飼つて八月七日頃に上簇し、秋蠶は八月十三日に出て九月十日頃に上簇する。山羊も近年副業に飼ふものが多くなつた。秋山は大體農半分、山稼ぎ半分といふことが出来る。山稼ぎでは炭焼は寧ろ僅かで、伐採と製板に儲はれるものが多い。奥地に三井の三共製板工場がありそれに儲はれるのである。梓山と同様、秋山も、悲慘な話したが、事業家に山のツガ、シロキ等を安くで賣つて仕舞つた。それで此の土地に製板工業が發達し、現在村人はそれに儲はれてゐる譯であるが材木が伐採し盡された曉の村の運命は言ふに忍びないものではないのか。自ら慰める人達は未だ木は外にいくらでもあるとは言つて居るものの。

梓山には元來その上流に若干の水田があつたこと五萬分一地形圖上にも讀取れる如くであるが、今は前記の如く桑園と化して仕舞つてゐる。副業に飼ふ馬の數も梓山六五戸に三〇頭しかない。五

月初めから十一月の終りまで區有の梓山牧場に放牧し、個人持ち若しくは區有の草刈場から刈取つた草で舍飼することは大體秋山に於けると同様であるが（山羊を飼ふものもある）、秋山に於けるよりも梓山に於ける馬の飼育は盛でないと言はなければならぬ。その他の點では大體川端下や秋山と同様であるとも言へるが、梓山では山稼の方が農の方より盛であるやうに思はれる。梓山も秋山と同じくツガ、シロキの山を事業家に賣つて、その事業家の經營する製板事業（箱板など作る）、そのための伐採に傭はれてゐる譯で、材木の伐り盡された曉の運命はかんばしくないと思はれるが、兎に角梓山に於ける製板事業は盛んなもので、炭燒は寧ろ製板に壓されてゐる形である。併しその炭燒も相當盛んで、梓山では農より山稼が主であると言へる。そしてかかる林業、工業の發達のために梓山では戸數も最近六五戸から八三戸に増加してゐるのである。（明治四十三年測圖と昭和四年要部修正測圖とに於ける建物の記號の異同に注意）興味あることには此所では製板作業の動力として高價な電力を殆んど用ひず、又水車も殆んど利用せず、火力ボイラーを使用してゐることである。火力のための燃料（薪）は此處には幾等でもあると言ふのである。（安くで山を買つたためであらうが國家經濟からは如何かと思はれる）尙、梓山も聚落の起原は鑛業に負ふものの如くである。川端下と等しく嘗ては梓千軒と謠はれたとの口碑があり、信玄時代に此所から金が採掘せられたと言ふのである。而して此の金は今尙ほ採掘せられてゐて、それが又最近に於ける梓山戸口の増加に大きな作用を與へてもゐるのである。

本圖幅中の聚落として前掲拙稿には尙ほ、金山を挙げ、その本性不明と記して置いたのであつた。

井上修次氏の御示教により金山には家が二軒あることを知りながら今回の旅行に於いては實地調査を行はず、汗顔の至りであるが、その起原は、恐らく梓山、川端下と同様、鑛業に負ふのではなからうかと思はれる。暫く疑を存して後の研究に俟つ。

尙、梓山、川端下等に關した史蹟傳説のことが磯部杳坡氏の「小海沿線の史蹟と傳説」(山小屋、昭和十一年九月號、四九—五二頁)のうちに記されてゐるから同好の士は參照せられ度い。

上高地圖幅

前掲拙稿には平湯峠一六八四米を擧げ、峠の茶屋かと記したが、これは實際は茶店ではなく而も無住である。平湯峠に因んで高度一三〇〇米以下ではあるが平湯の聚落に就いて記して後の參考に資し度い。平湯は一二二〇—一三〇〇米の緩斜面に立地し、家は二七軒あり、常住である。二七軒の中一二軒は宿屋であり一五軒は百姓である。宿屋は一二軒と言つても多くは片手間で、比較的大きな七軒だけが先づ專業である。その大きな宿屋も副業に山稼ぎをしたりする。炭焼もやるが、自家用である。温泉のぬくみの及ぶ所では稻(モチ米)が作れ、又稗を作るが、それだけでは不足で、食糧その他の物資は船津、富山方面から輸入する。家は、分家するものがあつたり、又他所から入込んで飲食店などを營むものがあつたりするので、毎年一軒くらゐは殖える方であると言ふ。土地の女は雪袴をはき男も女も雨には藁とシナノキの皮とで作つたバンドリを着る。羚羊は禁獵であるがその皮で作つたミ、ハは非常によいと言ふ。(此の項、昭和十年五月調査)

中ノ湯は前掲拙稿には一四八〇米位、温泉、建物の記號見えぬ位として置いたが、昭和五年修正

測圖には建物の記號もよく見え、またその圖上での高度は一四〇〇米くらゐとするのが正しいやうである。そして實際此所には立派な溫泉旅館も存することは周知の如くである。

上高地溫泉も周知の如く溫泉聚落で、清水屋ホテルなどの旅館があるが煩はしいから多く記さない。その外上高地には溫泉を離れた地點にも旅館（一例五千尺・帝國ホテル）や茶店（一例古城屋）など多くの建物が出来てゐるがこれ又煩はしいから詳記しない。

養魚場は縣營で、鯉、岩魚を養殖し、番人は冬も居り常住である。

徳本峠は前掲拙稿には峠の茶屋かとしたが、正確に言へば徳本峠頂上小屋で、これに就いては山日記を參照のこと。

尙、此處で徳澤園のことに言及して置く必要がある。徳澤が梓川の本流に合流する附近には昨年まで上高地牧場があり、高度一五六〇—一五八〇米の地點に事務所があつて、牝牛六〇頭ばかりを預かり放牧してゐたのであるが、採算がとれず昨年廢止、事務所を改増築してホテル徳澤園としたのである。當時牛は五月二十五日頃でないと上げられず（牧草の發芽が遅れるため）、近年は殊に牧草の發芽が遅れて六月二十日頃でないと上げられない情態にあり、而も秋は十月十五日には閉場しなければならなかつた。組合の牧場であつたが、かかる牧草の關係と、縣でも牛の上る徳本峠の道路は餘り顧みて呉れなかつたといふ關係とから結局廢止したのであると言ふ。（そのため後述の番所原の牧場に牛が多く入るやうになつたのである）。尙ほ徳澤園はスキー家のため冬期も開いてをり常住であることを附記する。

檜ヶ嶽圖幅

中房溫泉は堂々たる旅館を有する餘りにも著明の溫泉で、これに就いては多くを言ふの必要もないであらう。

立山圖幅

立山溫泉は今夏の旅行では上から見下しただけであるが、堂々たる旅館を有つてゐる。井上氏の御示教によれば旅館は三軒あるが夏だけであるとのことである。

雄山神社には社務所があり神主佐伯氏等が住んで居られるが、但し冬は蘆畔寺の里宮に下山せられる。

前掲拙稿には平ノ小屋を挙げ登山用小屋かと記したが、如何にもその通りである。併し登山用小屋をも舉げるならば、昭和五年修正測圖にも記入せられてゐる如く、高度一三〇〇米以上のものとして立山だけでも弘法小屋、追分小屋、天狗平ヒュッテ、室堂などを挙げなければならぬ。併しそれ等に就いては凡て山日記に譲る。尙、平ノ小屋の附近には東電小屋があり、井上氏の御示教によれば年中人が居るとのことであるが、平ノ小屋は十一月には蘆畔寺の方へ歸るとのことであつた。

乗鞍嶽圖幅

野麥は飛驒から信州に入る木曾街道に沿ふ堂々たる定住聚落である。米は産せず、稗（ハサ）に架けて乾す蕎麥などができるに過ぎないが其處には多くの人達が住んでゐる。米は飛驒側では馬車で上ヶ洞まで上つて來るのを負ひに行き、信州側では川浦までこれ又負ひに行くのである。其れに稗

を三分乃至五分混じて食べる。又蕎麥を食べ、稗を團子にしても食べる。(蕎麥も團子にするか)畑には豆なども植ゑるが、一毛で、副食物としては山に生える獨活^{ウド}、蕨^{ワラビ}、アカザ、イラなどを食べる。焼畑は現在では作らぬ。麥も少ししか作らない。副業には桑を植ゑ、養蠶をやるが、土地が高く、氣候が寒いので春蠶はできず、夏蠶一回だけである。また牛を飼ひ、夏は山に放牧する。(ハナス)今では牛の方が馬よりは多く飼はれる。冬の飼料としては、草場^{クサバ}があつて、木を切り山を焼いて草のよく出るやうにして置いた所から刈つた草を與へ、またそれを踏ませてコエを取る。尤も肥料としては、踏まさないコエ(草肥)をやることもある。野麥の副業として輕視できないのは蕨粉の製造である。山に自生の蕨を取つて、槌でその根を打ち碎き、それを一種の箱で濾し、大木を刳つて作つた一種の舟に沈澱せしめて製するのである。物の運搬にはシ、ヨ、イ、コを用ひ積雪時の歩行にはワ、カ、ン、ジ、キを穿く。屋内には圍爐裡があり、いろりの上にはア、マ、ダ、ナ、ソ、ラ、カ、ギ、ジ、ザ、イ、カ、ケ、ザ、ヲなどの附屬物があり、そこには味噌^{ミソ}、玉^{タマ}などが吊されてゐる。いろりの座の名稱はヨ、コ、ザの右側がタ、ナ、モト、左側がシ、モ、ザ、向側がザ、ジ、リである。氏神は熊野神社であり、また野麥には卯月八日の祭があると言ふ。(此の項、昭和十一年五月調査)

前掲拙稿には擧げず、又昭和六年要部修正測圖にも記載されてゐないが、野麥峠(一六七・二米)には御助け小屋が一軒あり、老夫婦が常住してゐるが、筆者等通過の際は不在であつた。この御助け小屋は必ずしも近年流行の登山を安全にするためのものではなく古來木曾街道の交通を確保するためのものであつた。これは峠から信州の川浦に下る路傍に馬頭觀世音の碑(一例、明治七年建之、

明治二十七年建之等のものがある）が數多く認められることと併せ考へらるべきものである。明治二十七年頃までは馬による、また脚によるこの街道の交通がまだ相當盛んであつたものと考へられる。

白骨温泉は小島島水氏明治三十五年作の「白骨温泉の記」以來有名になつたのでないかと思はれるが、今尙ほ俗化してゐない。温泉旅館は當時以來の元湯、新宅、柳屋、大石屋の四軒であり、それに御土産店など若干の家があつて、夏は避暑客、秋も探勝客で賑はふ。

番所は前掲拙稿に番所原として擧げたが聚落名は番所である。昭和六年要部修正測圖には番所と訂正せられてゐる。但し土地の人はバンショともバンドコロとも呼び何れが正しいのかを知らない。番所の聚落は一部分は高度一三〇〇米以下であるが、一三〇〇以上の部分にも多くの家があり本邦に於ける高度一三〇〇米以上の聚落としては、その一部を取つただけでも、相當大きな聚落に屬する。併し以下の記述は便宜一二四〇—一三〇〇米の部分をも含めた番所全體の記述である。（讀圖によれば一三〇〇米以上の建物の記號數三五に對し以下のそれは二二である、その他神社は一三〇〇米以上にある）番所では稻も作るが水田の開けたのは數年前からである。そして勿論米は不足で不足の米は牛に着けて島々方面から持つて來るのである。耕作は畑作が主で、稗、粟などを作り、多くはそれを米に混せて食べる。（筆者も試食す）その他、豆や蕎麥などを作り、蕎麥は團子にしても食べる。近年は馬鈴薯も多く作られ種薯として移出せられる。聚落立地より高度で一〇〇米も上に蕎麥、稗、馬鈴薯などの畑が認められる。更に高度一四八〇米に近い鈴蘭小屋の附近に番所の出作小屋

が三〇軒もあり、そこで馬鈴薯、蕎麥、豆、葱、麻などが作られてゐる。(出作小屋は夏の耕作時だけのものであるが鈴蘭小屋と他の二軒の小屋には主としてスキー客のため冬も人が居る)そして耕作は鈴蘭小屋より上にまで及んで居り殊に蕎麥の栽培がえも言はれぬ美觀を呈してゐる。餘り米を作らぬ番所にも水車の廻るのが見られるが、これは蕎麥を搗くための水車である。番所の農家は鈴蘭小屋の邊まで出作するが、番所自身、少くともその一部は大野川の出作に聚落の起原を有つものである。現に近年にも大野川の夏季の出作者が番所に永住することとなつたものがあるのである。現在番所には家が七〇戸ばかりあるが、最近にも家は殖える一方であると言ふ。勿論分家するもののあるのにもよるが、他所から入込み百姓するものがあるのにもよるのである。他所と言つても元來番所は大野川區のうちで、番所の寺(禪宗)は大野川にあり、氏神(梓水神社^{アツサミヤ})も大野川との境にある次第である。當所では牛の飼育が相當盛んである。筆者は前記拙稿に、又牧畜をやるかと記して置いたが此の想像は適中した。現在六〇頭もの牛を飼つてゐる。番所の入口には馬頭觀世音の碑が多く(大日如來と馬頭觀世音とを併せ刻した碑も一面認められた)明治以前は馬を多く飼つたらしいが、明治以後は多く牛を飼ひ、殊に最近二十年來はホルシュタイン種の牝牛を飼ふものが多いと言ふよりは、牝牛が殆んど獨占的である。牛は五月初めより十月終りまでは組合所有の高原牧場に放牧し、冬は乾草(夏刈り置く)を與へて舍飼ひにする。牧場には木柵を施してゐる。毎年日を定めて(七月十三日)縣の係員が出張し、牛を検査して病氣の有無を見る。高原牧場には今年は牛が一〇〇頭くらゐ居ると言ふから他からの牛をも預かつてゐるものと思はれる。馬は極めて少數居るだ

けである。犢は此の土地で産れるが、牡であれば直ぐに賣つてしまひ牝牛だけを育てる。牝牛は四歳で乳が出るやうになるが、松本方面の牛乳屋に貸しつけ、十二、三歳に達した時賣りに出す。冬の飼料は夏の中に刈つて置くのであるが（白樺の木の下に草を乾した風景もほほえましい）、放牧場が組合の共有であるのに對して草刈場は個人持ちであると言ふ。牛は賣りにも出すが買ひにも来る。何れにしても賣るのは大體夏のうちであると言ふ。併しこの牧畜も番所では副業であると言ふ。番所の百姓は炭焼、養蠶が主で、牛は副業であると言はれてゐるのである。桑を作つて養蠶をやることは他と異ならないとして、此處では夏蠶、秋蠶の二回しか行へないのであるが、併し養蠶は盛んで、筆者の泊つた番所の旅館でも客室の一部を蠶室に宛ててゐた程である。唯、氣候が寒くて今年は八月五日といふのに宿の主人は火のある圍爐裡の傍でセルを着て夕食してゐたくらゐであるから、大野川では春蠶もやるのに、此所では春蠶は飼へないのは残念であるに違ひない。炭焼も相當重要ななりはひで、此の點で番所は山村といふことが出来るかも知れない。官有山林の拂下げを受け、又村有の山林（村附近の山は村有である）があつて炭を焼き、松本方面に出すのである。番所に山村的色彩を與へる他の一つのは山の神の存在である。即ち番所には「御山神」の小祠があり、そこには他の山の神に於いても認められる如くに、矢の形を作つて献ぜられてゐるのが見られるのである。番所を山中の僻村としては相當裕福なものたらしめてゐるものは、水力發電所からの地代の徴收である。尙、些細なことで此所に附記して置き度いのは、五月、粽を巻くのに使ふ菅を番所の上の方で刈つてゐるのを見たことと、例の圍爐裡の座の名稱のこととである。番所ではヨコ

ザの右側がテ、イ、ジャ、シ、キ（これが亭主の座である）、左側がジャ、ジ、リ、向側がカ、ツ、テであるとのことであつた。村の歴史には觸れないで、此處には唯、番所からは石鑱^{ヤシ}及び繩紋式土器が多量に發見せられることを記すに止めよう。

戸 隱 圖 幅

前掲拙稿には戸隱奥社を擧げて置いたが、此所には同社の社務所があり、神官が冬も十日間泊りの交代で三人居る。即ち年中神官が三人はゐる譯で常住である。中社から此所まで夏ならば快い散步道であるのが冬はカンジキをかけて一日がかりであるといふ。殊に本年は雪が多くて雪崩れは奥社の九頭龍神祠を全壊せしめ朝勤中の一神官の命を奪つた。併し社務所は地山の大磐石を盾としてをり圍爐裡を切つてをるから雪崩に對しても先づ安全、寒氣も先づ凌げるといふものであらう。奥社の附近では晩春エ、ラ（イ、ラを訛つたのであらう）やソ、バ、ナやウドや蕨などが出、又雪が消えれば楡の木にニ、レ、プ、サと稱するきのこが出て夏中あるので其れ等のものが食膳に上される。但し戸隱名物蕎麥はこの邊では出来ない。（此の項昭和十一年春の調査による。尙ほ戸隱の雪崩に就いては昭和十一年八月號の地學雜誌に八木貞助氏の詳細な報告があるから參照のこと。）

白馬嶽圖幅

前掲拙稿には本圖幅中の溫泉として蓮華溫泉と黄金湯との二つを擧げて置いた。併しそれ等を擧げるとすれば鏈溫泉即ち白馬溫泉をも擧げなければならぬ。高度二一〇〇米の高位置にあるが建物もある。併しそれは登山客が休泊して行くだけのもので、この溫泉目的に入湯だけに來るといふ人

もないであらう。だからこれは寧ろ登山小屋の範疇に入れて置いて置いて不可ない。

黒部 圖 幅

前掲拙稿には大黒銅山を擧げて置いたが、昭和五年修正測圖ではそれが大黒銅山跡として記されて居る。これが定住的の聚落であるか否かは圖上では不明であつたのであるが、今やこの銅山が消滅したすると現地調査によつてこれを確めることは出来難くなつたのである。

白山 圖 幅

前掲拙稿には奥院(二六八〇米)を擧げたが白山神社を擧げなかつた。これは筆者の粗漏で實際は此處にも神祠がある。併し神官は夏だけしか居ない。(此の項、昭和八年秋の調査による)その他室堂など登山關係のものがあるがこれは山日記に譲る。

前掲拙稿には御神鑛山を擧げたがこれは昭和五年要部修正測圖によれば、消滅して居り、尾上郷川から鑛山への登路も無くなつてゐる。

御嶽山 圖 幅

前掲拙稿には登山關係のものとして石室、二ノ池を擧げ、御嶽登山用ならんと記して置いた。これは實際に於いて筆者想像の通りである。併し御嶽登山用の石室、小屋、茶店の類を擧げるとなると殆んど際限がないくらゐ御嶽山にはその種のものが多いのである。これ等については凡て山日記を参照のこと。尙ほ嶽ノ湯(一八〇〇米、濁川温泉)に就いても山日記に記載がある。

前掲拙稿に假に劍ヶ峯神社として擧げて置いたものは實は黒澤口頂上御嶽神社本社であつてそこ

には社務所があり、社務所には神官があるが冬は下山する。又拙稿に王瀧神社として置いたものも實は王瀧口頂上御嶽神社本社で社務所があり、そこにも神官のやうな人が居るが冬は下山する。

木曾福島圖幅

御嶽登山道に當る小屋に就いては前圖幅について述べたと同様のことが言へる。また前掲拙稿に挙げた三笠山の神社も御嶽山の信仰と關係した神祠である。

前掲拙稿には内ヶ谷小屋と共に、留ノ原小屋を舉げて置いたが、後者は昭和六年修正測圖では留野原と改められてゐる。これは興味ある研究の對象をなすと思はれるので後の調査を期す。修正測圖上では、留野原に小徑が一本無くなつてをり、且その建物の記號が四個から二個に減じてゐるが注意せられる。但しそれは高度一三〇〇米以下の部分に於いてである。

妻籠圖幅

前掲拙稿には大平峠(木曾峠)を挙げ、大平街道、峠に近くある茶屋かと記して置いたが、此の峠には茶店の類はなかつたかと思ふ。(此の項昭和五年春の記憶による)然るに今夏通行の某學士の言によれば、峠には茶店の類と御嶽遙拜所とがあるとのことである。但しそれが個人の經營か自動車會社等の經營か、常住であるか冬は閉鎖するか等を明かにすることを得ない。再調査を期す。

男體山圖幅

金精峠に就いては前掲拙稿に、或は茶屋位あるかと記したが峠には茶店はなく、陽石を祀つた神祠があるだけである。

二荒山神社（二四八四米）には社務所があり、男體山の山開きから後は神官が滞在するが勿論常住ではない。神官は平常は中禪寺湖畔の二荒山神社に奉仕するのである。

湯元は周知の如く温泉聚落で、南間ホテルその他の旅館が多く、常住である。（以上三項昭和十年夏調査）

那須嶽圖幅

前掲拙稿には本圖幅に屬するものとして日留賀嶽神社と三斗小屋温泉とを挙げ、後者に就いては神社の記號の外に建物の記號三つ四つありと記した。併し實際には温泉神社の外に旅館としては大黒屋と煙草屋との二軒があるだけである。大黒屋の方が古く、これは越冬するらしいが、煙草屋の方は冬スキーシーズンの後二月頃一時三斗小屋に下る。因みに三斗小屋（一三〇〇米より以下、一一〇——一二二〇米）は上野の板室と會津の野際新田ノギンデンとの丁度中間、交通上の要點に位し、昔は四八軒あつたが、今は地形圖上にも讀取れる如く、五軒に減じて仕舞つてゐる。この附近には熊が出現に煙草屋にも熊の皮が吊してあるが、警戒を要するのは親熊が子熊を連れ歩く頃だけで、普通は熊は人の通る所などには出て來ない、又出て來ても危険は尠いと言ふ。

前掲拙稿には日留賀嶽神社と三斗小屋温泉とを舉げるに過ぎなかつたが、若干補ふべきものがある。

那須嶽山事務所及硫黄精鍊所。昭和八年要部修正測圖上でも、一四五〇——一四八〇米の高度に建物の記號が九つばかり認められる。その最下の一四五〇米附近のものは茶店の類であるが、他は事務

所及び精鍊所の建物及び社宅の如きものである。精鍊所は冬も作業するが、併し冬は月のうち二十日は吹雪で、工夫も半減せられるとのことである。

峰の茶屋。那須嶽の北の肩、高度一七二五米の分水嶺に位置する一軒の茶店であるが、營業は十月一杯でその後は出茶屋である。(朝來て夜歸る)

飯盛溫泉。高度一四八〇米の附近に旅館が一軒ある。夏でも避暑客殺到せず學生などが勉強するのに適する山の場であり秋は紅葉がすばらしいと言ふが、十二月になると湯本に下りて仕舞ふ。

郭公溫泉。鑛山事務所の直ぐ近く、高度一四六〇米の邊に旅館が一軒ある。その他那須嶽の斜面には那須湯本、新那須、八幡(以上白河圖幅)高雄、辨天、大丸、旭、北の諸溫泉があるが何れも高度は一三〇〇米以下である。

妙高山圖幅

前掲拙稿には本圖幅に屬するものとして何等擧げるところがなかつたが、昭和五年修正測圖によると妙高山の西南麓、笹ヶ峯牧場、高度一三〇〇米のところに牧場の事務所(これは明治四十四年測圖にも記載せられてゐる)と一三二〇—一三四〇米の地點に京大ヒュッテとが記載せられてゐる。また妙高山頂(二四四五米)の附近に神社と建物のしるしが記入せられてゐる。此の地方は未調査であるが後の參考のため記載して置く。(昭和十一年九月十一日稿)